

一つのすぐれた個性の喪失

砂 原 茂 一

水野さんの計がとどいた時、私はたまたま「ヒトの足」を読んでいて、そしていかにも水野さんらしい仕事だと思いつつ同時にその人間としての非凡さ、学者としての偉大さをあらためて再発見した思いであった。

整形外科と無縁な私は、水野さんのお名前を古くから知っていたわけではない。最初の出会いは昭和31年の障害等級調整研究会であったが、顔をまっ赤にして滔々とまくしたてられる姿にまず驚いた。同時に大変な仕事熱心で最後の段階になると、担当の厚生技官宅に夜襲をかけたり、その技官を会議の席上で一喝されたり……何しろ特異な存在であった。おかげでこの委員会は私の関係した多くの審議会の中でもっとも面白い、印象深いものとして記憶に残っている。その後理学療法士・作業療法士審議会に同席することになったが、委員のうちもっとも発言量の多いのは水野さんで、その長舌と鋭い断定にブレーキをかけるのに、座長である私が少なからず苦勞したものであった。リハ医学会の役員会の場合もそう、大体学会の名誉会員というのはいよく雑壇に祭り上げられているものだが、水野さんがいるとそうはいかない。しばしばオビニオンリーダーとして活躍し、私などがその尻馬に乗って思いつき発言をするものだから、いささか院政の気味がなくなかった。しかし水野さんは、おしゃべりばかりしていられたわけではない。PT、OT 国家試験の大阪における実地試験の実質上の目付として、たえず東京の津山さんと連絡をとりながら、各試験委員の評価の地ならしをするために毎日、試験場に足を運んでこまかな気配りを怠らなかった。

いろいろな席で私はしばしば先生の医学教育、山登り、イギリス、アフガニスタンなど多岐にわたる体験談と、それにもとづくユニークな発想の聞き手になったわけだが、発揚型、自己主張型できわめて個性的な人物で

あるという印象をもっただけで、何しろ専門違いだから水野さんの固有の領域における学問の方法、業績、力柄についてはほとんど知るところがなかった。そのために申訳ない話だが表面的に、にぎやかな、いささかケタはずれの人物として受けとめていたキライがないではなかったのである。

ところが今度「ヒトの足」を読んでその学問的感覚の鋭さ、論理の柔軟さ、発想の独想性、表現の自由さに目を見張り、おそまきながら水野さんの本質をかいま見た思いであった。先生がとすれば学界の型破りのように見られていたのは、むしろわが国の医学界の固陋ともいふべき保守的で、ステレオタイプな体質のせいであって、おそらく水野さんは進歩の基礎を率直な相互批判におく、ヨーロッパ的な学問伝統を理解しない日本の医学の風土に強い欲求不満をもっていられたに違いないのである。リハ学会の席上などで、ときに若い演者を叱咤されたのも学問の基本を見失った姿勢に、どうしようもないいらだちを感じられたからに違いないと思われる。

「ヒトの足」の序文を書いているのは医学者ではない今西さんや梅棹さんだし、エビログでは予科時代の先生一平瀬作五郎、吉田貞雄、小倉金之助らへ熱いオマージュを捧げながら、医学の専門課程については「全くバカげた形式カリキュラムの形骸講義」と切捨てているのを読んで、先生の日本医学批判は昨日今日のことでないのを知ったのである。

幅広い、ユニークな人であったし、ひとがなくなればはめるのはしきたりだから、いろいろな讃辞が捧げられるであろうが、むしろ私は水野さんの淋しさと怒りを正しく受止めることが、あとに残された私達のつとめではないかと考えるのである。

(国立療養所東京病院名誉院長)